

戦艦大和（其之三）（相原泥舟）

戦艦大和の最期

雷撃 舷を擣いて 巨体 揺らぎ

轟然 爆裂して 勇姿 消す

不沈 戦艦 名も 還た 憫れなり

波底 空しく 為す 大墓標と

雷撃摧舷巨體揺 轟然爆裂勇姿銷  
不沈戦艦名還憫 波底空爲大墓標

解説 戦艦大和の最後を詠じた詩。

大意 世界最大最強を誇った日本海軍の戦艦大和は、太平洋戦争末期の昭和二十年四月六日、水上特攻として沖縄に向け出撃したが、翌七日、九州南方海上で、十二隻の米海軍新鋭空母から発進した数百の雷爆撃機による波状攻撃により、遂に午後二時二十三分、約三千名の乗組員と共に爆沈、今も乗組員達は海底で静かに眠っているのである。

語釈 ※雷撃Ⅱ魚雷などによって敵艦を攻撃すること。※舷Ⅱふなばた。ふなべり。※轟然Ⅱ大きな音のとどろき響くさま。※爆裂Ⅱ爆発して破裂すること。※墓標Ⅱ墓のしるしとして立てたもの。墓の上に立てた木や石。

通釈 大和の強力に装甲された分厚い舷側も、米海軍攻撃機の執拗に繰り返される魚雷攻撃により、蜂の巣のように細分化され不沈を誇った大和の防水区画も次々と破壊され、大量の浸水はその巨体を次第に傾け、遂には轟然たる爆発音と共に、その勇壮なる姿は海中深く消えてしまったのである。建艦当時は輝かしい戦果が期待された大和であったが、海戦の様相はすでに艦対艦の時代から艦対空の戦いへと大きく変貌し、その世界最大の巨砲の威力を発揮する機会もなく、今となっては「不沈戦艦」の名も却って憐れを催すばかりである。青々と広がる大海原の波底深く横たわっている大和は、三千名の英霊と共に、今も尚、空しく南海の大墓標となつているのである。